

SCIENCE COMMUNICATOR



独立行政法人
国立科学博物館

国立科学博物館 大学パートナーシップ

サイエンスコミュニケーター

養成実践講座

理論と実践の
対話型カリキュラム

UNDERSTAND
深める

COMMUNICATE
伝える

ACTIVATE
活かす

ENGAGE
つなぐ



サイエンスコミュニケーターとは

進歩を続ける科学技術、私たちはその恩恵を受けて日々暮らしています。一方、科学技術そのものを理解することは、多くの人にとって困難になりつつあります。人と自然と科学技術が共存する持続可能な社会を育むために、私たち一人ひとりが科学技術について、主体的に考え行動すること。それが、これからより一層必要となるでしょう。そのきっかけを与え、社会のさまざまな場面において、人と科学技術をつなげる、それがサイエンスコミュニケーターです。

平成26年度 募集要項 講座の概要及び出願方法

講座の概要

科目	サイエンスコミュニケーション1 (SC1)	サイエンスコミュニケーション2 (SC2)
対象	大学院生、博物館職員等 ^{※1}	SC1を修了した者
会場	主に国立科学博物館（上野地区）	
開講期間	平成26年7月～8月（予定）	平成26年10月～12月（予定）
コマ数	36コマ程度 （1コマ90分・4単位相当） ^{※2}	36コマ程度 （1コマ90分・4単位相当）
募集定員	20名程度	10名程度

・所定の課程を修了すると、SC1では修了証が、SC2では認定証が授与されます。

※1 SC1の受講を希望する社会人（教職員等）の方は相談に応じます。

※2 SC1を受講する筑波大学の学生は、筑波大学において平成26年度大学院共通科目『サイエンスコミュニケーション養成実践講座』（科目番号01ZZ308、担当者：小川義和）の履修申請をして、修了することにより、4単位が認定されます。

・SC1を受講する東京工芸大学の学生は、『サイエンスコミュニケーション養成実践講座』（平成26年度大学院工学研究科工業化学専攻、担当者：高橋圭子）の履修申請をして、修了することにより、4単位が認定されます。

受講料

一科目	61,710円 （国立科学博物館 大学パートナーシップ入会大学の学生は 30,860円 ） ※平成26年度の入会大学については当館のウェブサイトをご覧ください。下記担当までお問い合わせ下さい。
-----	---

受講までの流れ

- ### 1 出願

“サイエンスコミュニケーション1”のみの募集になります。以下の必要事項を国立科学博物館のホームページからお申し込みください。
ホームページアドレス
<http://www.kahaku.go.jp/learning/university/partnership/02.html>

必要事項

 - 住所、氏名（ふりがな）、年齢
 - 電話番号、E-mailアドレス
 - 大学名、専攻名、学年（所属）
 - 志望動機（400字程度）
 - 自らの専門領域等をわかりやすく、A4一枚（図示可）で説明したもの（ファイル名に氏名を必ず入れること、自作のみ有効とする）
 - あなたの考える“サイエンスコミュニケーション”とは？（200字以内）
 - “サイエンスコミュニケーション2”の継続受講希望の有無（継続受講希望者を優先します）

※収集した個人情報は、受講者管理等、本講座に付随する目的のみに利用いたします。
出願〆切：平成26年6月2日（月）17時まで必着
- ### 2 受講者の決定

6月20日（金）に、受講の可否を通知いたします。応募者多数の場合には、提出物をもとに選考いたしますので受講いただけない場合もあります。また、「大学パートナーシップ」入会大学の学生を優先させていただきます。あらかじめご了承ください。
- ### 3 受講料の支払い

受講料のお支払い方法等については、受講の可否通知とともにご案内いたします。

お問い合わせ



〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20
国立科学博物館 学習企画・調整課
ボランティア活動・人材育成推進室 SC担当
E-mail: sc@kahaku.go.jp TEL: 03-5814-9874

実施予定日 … ※3

サイエンスコミュニケーション1 (SC1)				
月 日		10:00～11:30	13:30～15:00	15:30～17:00
2014年				
7月 15日	火		1_01	1_02
7月 16日	水	1_03	1_04	1_05
7月 17日	木	1_06	1_07	
7月 22日	火	1_08	1_09	
7月 23日	水	1_10	1_11	
7月 25日	金	1_12	1_13	
7月 28日	月	1_14	1_15	1_16
7月 30日	水	1_17	1_18	
8月 1日	金	1_19	1_20	
8月 3日	日	1_21	1_22	
8月 7日	木	1_23	1_24	
8月 11日	月		1_25	
8月 12日	火	1_26	1_27	
8月 18日	月	1_28	1_29	1_30
8月 19日	火	1_31	1_32	1_33
8月 22日	金	1_34	1_35	1_36

サイエンスコミュニケーション2 (SC2)					
月 日		10:00～11:30	13:30～15:00	15:30～17:00	18:00～19:30
10月 3日	金			2_01	2_02
10月 5日	日	2_03	2_04	2_05	
10月 10日	金				2_06
10月 12日	日	2_07	2_08	2_09	
10月 17日	金				2_10
10月 19日	日	2_11	2_12		
10月 24日	金				2_13
10月 26日	日	2_14	2_15	2_16	
10月 31日	金				2_17
11月 1日	土	2_18	2_19		
11月 7日	金				2_20
11月 14日	金				2_21
11月 15日	土	2_22	2_23		
11月 22日	土	2_24	2_25		
11月 28日	金				2_26
11月 30日	日	2_27	2_28		
12月 5日	金				2_29
12月 7日	日	2_30	2_31		
12月 13日	土	2_32	2_33	2_34	
12月 18日	木		2_35	2_36	

※3・担当講師等の都合上、スケジュールは変更する場合があります。
・講義後に議論の時間を設けることがありますので、終了時間はこの限りではありません。
・講義では、事前事後課題の提出が求められます。
・地震や節電等の状況により、スケジュール・内容は変更する場合があります。



この印刷製品は、石油系溶剤の一部を植物油に置き換えたベジタブルインキを使い、有害な廃液を出さない水なし印刷方式で印刷されています。

つながる知の創造

国立科学博物館 サイエンスコミュニケーター養成実践講座とは

講座は理論と実践を通じて、4つの資質・能力を総合した「つながる知の創造」を目指しています。



受講者一人ひとりが実際のサイエンスコミュニケーションの場において「試行錯誤」を繰り返すことで、より深く考え、人々に知を伝え、人々の知をつなぎ、知を社会に還元することが重要です。そして、これらの過程を通じて、サイエンスコミュニケーターとしての確かな資質・能力と自信を身につけることができます。国立科学博物館には、独自の人的・物的資源が豊富に蓄えられています。膨大な資料とそれに基づく研究および展示、さまざまな場面で提供される学習支援活動、そして年齢も考え方も多様な来館者……。こうした資源や特性を存分に活用した「実践」が、本講座には組み込まれています。



専門領域の理解を深める

国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーターとは

科学系博物館や大学はもちろん、企業やメディアなど社会のさまざまな場面において、サイエンスコミュニケーターとしての資質が求められています。この講座を通じて、大学での専門性をもとに、博物館の総合性を兼ね備えた「ハイブリッド」な人材として成長し、さまざまな課題に対応していくことが期待されています。

夏期、秋・冬期に集中した講座

サイエンスコミュニケーション1(SC1)とサイエンスコミュニケーション2(SC2)の、2つの科目を修了された方を「国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター」に認定しています。

SC1 夏期

コミュニケーション能力を高める

サイエンスコミュニケーションの考え方を学び、一般の人々と科学技術をわかりやすく語り合うための資質・能力(コミュニケーション能力)を習得する

サイエンスコミュニケーション **1** 修了

SC2 秋・冬期

コーディネーション能力を高める

専門家、一般の人々それぞれの立場から科学技術をとらえ、人と人をつなぐための資質・能力(コーディネーション能力)を習得する

「国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター」誕生!

(((この講座での経験を社会のさまざまな場面で活用してください!)))

例えば、科学系博物館、大学、研究機関、企業の広報、メディア、行政(科学技術政策)、理科教育など

SC1 サイエンスコミュニケーション1

1 コミュニケーション環境の理解

○博物館を知る

博物館の基本機能とは何か。国立科学博物館とは、どのような場で、どのような人が訪れ、どのようなコミュニケーションが行われているのか。また、そこにはどのような学習資源（資料とそれらに基づく研究および展示・学習支援活動）があるのか。こうした、サイエンスコミュニケーションを学び実践する上で必要なコミュニケーション環境について、まず理解を深めます。



受講生と講師によるディスカッション

2 サイエンスコミュニケーションの考え方

○サイエンスコミュニケーションとは

サイエンスコミュニケーションの誕生と現在に至る経緯について概観し、国内外の社会的動向と照らして、サイエンスコミュニケーションの考え方について学習します。それを踏まえ、科学系博物館および科学館におけるサイエンスコミュニケーションの特徴について学習します。



展示室において自らの専門を伝えるコミュニケーション(発表)

3 サイエンスコミュニケーションの実践

○実践事例

メディア・研究機関・大学・科学館など、各機関・領域で活躍しているサイエンスコミュニケーターの実践事例を学習します。

○博物館での事例

研究者は、資料(モノ)から始まり、研究、展示を経て、一般の人々が納得する説明に至るまでの一連の流れをどのように組み立てているのでしょうか？ 国立科学博物館の研究者の実践を、グループ学習を通し体験します。

4 サイエンスコミュニケーションに必要な資質・能力(コミュニケーション能力)

○サイエンス・ライティング

一般の人々と科学技術について分かりやすく語り合うためのコミュニケーション能力のうち、「書く」技能に焦点を当てて学習します。

○コミュニケーション(発表)

一般の人々と科学技術について分かりやすく語り合うためのコミュニケーション能力のうち、「演じる」技能に焦点を当てて学習します。



SC1 講師陣と受講生

5 課題研究とコミュニケーション(発表)

○アイデアを形にする力の育成

受講者自身が課題を考え、国立科学博物館の学習資源を使って自らの専門分野についてのトークを企画・開発・実施・評価することを目指します。(グループ学習)

題材の決定→トレーニング→予行→相互および自己評価→改善→展示室で来館者を前にコミュニケーション(発表)→評価

6 「サイエンスコミュニケーション1 修了証」授与

受講生の声

SC1の課題研究

『質問タイムが学会の質疑応答とは相当違って苦勞した。沢山の人の話を聞いてもらえることがこんなに嬉しいことだとは思わなかった。論文を書いて学会発表してという普段の研究のスタイルでは絶対に会う機会のないひとにメッセージが伝えられた！1つの発表について、ストーリーから発表まで1か月もの期間をかけて多くの人の意見を取り入れながら練り上げていくという経験は初めて。本当に学ぶことが多く、今後多くの場面でこの経験は糧になると思う。』 修士1年:女性

サイエンスコミュニケーションの考え方

『講義の内容のほとんどが新しいことだったが、特に驚いたのはサイエンスコミュニケーションの歴史が思っていたよりも深いこと。そして数十年の間にその考え方がめまぐるしく変わっているところだった。「欠如モデル」や「サイエンスリテラシー」などの概念が非常に新鮮だったが、同時にサイエンスコミュニケーションの難しさを考えてしまった。』

博士2年:女性

サイエンス・ライティング

『受け手の興味・関心を引く文章、プレゼンテーションについて、実感を持って理解することができました。』 社会人:男性

理論を学ぶ、それを踏まえた実践を行う、実践で生じた疑問などを再度理論に立ち返って考える。

このように、循環しながら発展を目指すのが本講座の特徴です。

また、積極的に全体で議論して共有する時間を設け、講義内容の習熟度を高めるとともに、「コミュニケーション能力」、「議論する力」を同時に養っていきます。

SO ENGAGE 2 サイエンスコミュニケーション2

1 サイエンスコミュニケーションに必要な資質・能力 (コーディネーション能力)

○ワークショップの運営について

科学者と市民をつなぐ、参加型の場づくりの技能である「ファシリテーション」を体験型のワークショップを通じて学びます。さらに、そのような場を企画・運営する側にとって重要な知識・技能も学びます。

○プロジェクトマネジメント

具体的な事例を通して、使命・資源・成果・評価などの視点から、事業を構造的に捉え、事業の運営に必要な知識・技能の習得を行います。



サイエンス・カフェの一場面

2 課題研究

○サイエンスコミュニケーション事業の企画と運営

子供や大人を参加者としたサイエンス・カフェ等を実際に企画・運営します。受講者が、どのようにすれば専門的な研究内容を一般の人々に伝えられるかを考え、研究者と参加者の間など「人と人をつなぐ力」を高めます。

以下の要素を中心に企画・運営を行います。

- ・研究者から話を聴き、内容をまとめる。
- ・「研究者の意図」を変えず、かつ「分かり易く」一般の人々に伝える。
- ・聞き手の反応をまとめ研究者にフィードバックする。

3 科学技術と社会の関係

○文化としての科学技術

「技術」という言葉は、日常でも幅広く使われ、自然に関わる対象を持つ技術（農業、土木、工業などに関わるもの）に限っても、おおよそ世界中にそれが存在しない地域はないと言っても過言ではありません。一方、「科学」は、どこで、誰が、いつ試してみても、有効な知識という意味で、普遍的な性格を持っています。

「科学」とは何か、「技術」とは何か、両者はどのように関わっているのか、という課題を、時に歴史に題材を取りながら議論を進めます。

○リスクマネジメント

サイエンスコミュニケーション活動に伴う、さまざまなリスクを制御するために、組織における情報の管理と活用を学びます。



認定証授与式の様子

4 「国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター認定証」授与

講座は国立科学博物館の研究者や教育スタッフはもちろん、様々な分野の方々に構成されています。

平成26年度講師予定（講師は変更する場合があります）

縣秀彦 国立天文台 准教授・天文情報センター 普及室長

井上透 岐阜女子大学 文化情報研究センター長

井上智広 日本放送協会 制作局

科学・環境番組 チーフ・プロデューサー

大枝奈美 コミュニティ・ファシリテーター

岡本拓司 東京大学大学院 総合文化研究科 准教授

坂本昇 伊丹市昆虫館 副館長

高安礼士 千葉市科学館 プロジェクト・アドバイザー

田代英俊 日本科学技術振興財団・科学技術館

経営企画室 グループリーダー

千葉和義 お茶の水女子大学

サイエンス&エデュケーションセンター長

元村有希子 毎日新聞社 編集編成局デジタル報道センター 編集委員

渡辺政隆 筑波大学 広報室 サイエンスコミュニケーター／

教授、サイエンスライター

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座修了者の活動

これまで8年間の修了者185名、うち認定者83名。平成23年度から、修了者の横断的なネットワーク構築のため、科博SCA（国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション）が立ち上がり、活動を開始しました。第1期生から第8期生までのそれぞれが社会の様々な場面で活動を広げています。

ACTIVATE

ミュージアム・カフェ会

中学生以上の方を対象にサイエンスカフェ
「カレンダーの作り方～星をみつめた江戸の人たち～」
を企画・実施しました。（2014年2月）



ミュージアム・カフェ会
告知ポスター

サイエンスライティング講座

修了者、一般の方を対象とした「サイエンスライティング講座
～サイエンスライターへの道も一文字から～」
を企画・実施しました。（2014年2月）

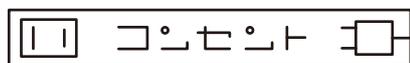


国立科学博物館等の イベントへの参画

震災復興・国立科学博物館コラボミュージアム
地元の子どもたちを対象に『3D恐竜ぬりえ』の
体験イベントを実施しました。（2013年8月）



サイエンスグッズ工房



国立科学博物館オリジナルグッズ

サイエンスコミュニケーション活動の一つとして、
研究機関や研究者と連携し
「教育と新しいコミュニケーション」を目的とした
サイエンスグッズの企画を行っています。
大手雑貨店や都内科学館などでも販売中。
<http://www.ritsumee.co.jp/shop/concent/index.html>



化石缶バッジ
(8種×各4色=32デザイン)

科博エコバッグ（現在は完売）

他にも、 こんな活動しています！

ウィークエンド・カフェ・デ・サイエンス
(WEcafe) <http://blog.goo.ne.jp/wecafe>



サイエンスコミュニケーション団体
Universal Earth（ユニアス）
<http://universalearthsc.blogspot.jp/>



降矢(上田) 裕子

学校法人片山学園 片山学園中学校・高等学校 教諭
H22年度 国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター
(当時:お茶の水女子大学大学院)



私は教育現場で科学の楽しさを伝える教師になりたいという思いから受講しました。受講後は、常に対象とする相手は誰なのかを意識するようになりました。単に楽しさを伝えるだけでなく、相手の立場やニーズを考えることがサイエンスコミュニケーションではとても重要である事を深く学びました。実践事例の講義、課題研究、サイエンスカフェ実践の中でも、対象とする相手は誰なのかについて重点的に考えました。現在は、理科の教師として、講座の経験を活かし、気軽に科学の最新情報に触れられる機会を増やし、さらに学生の生活に浸透したサイエンスコミュニケーションの環境作りに取り組みしていきたいと思っています。

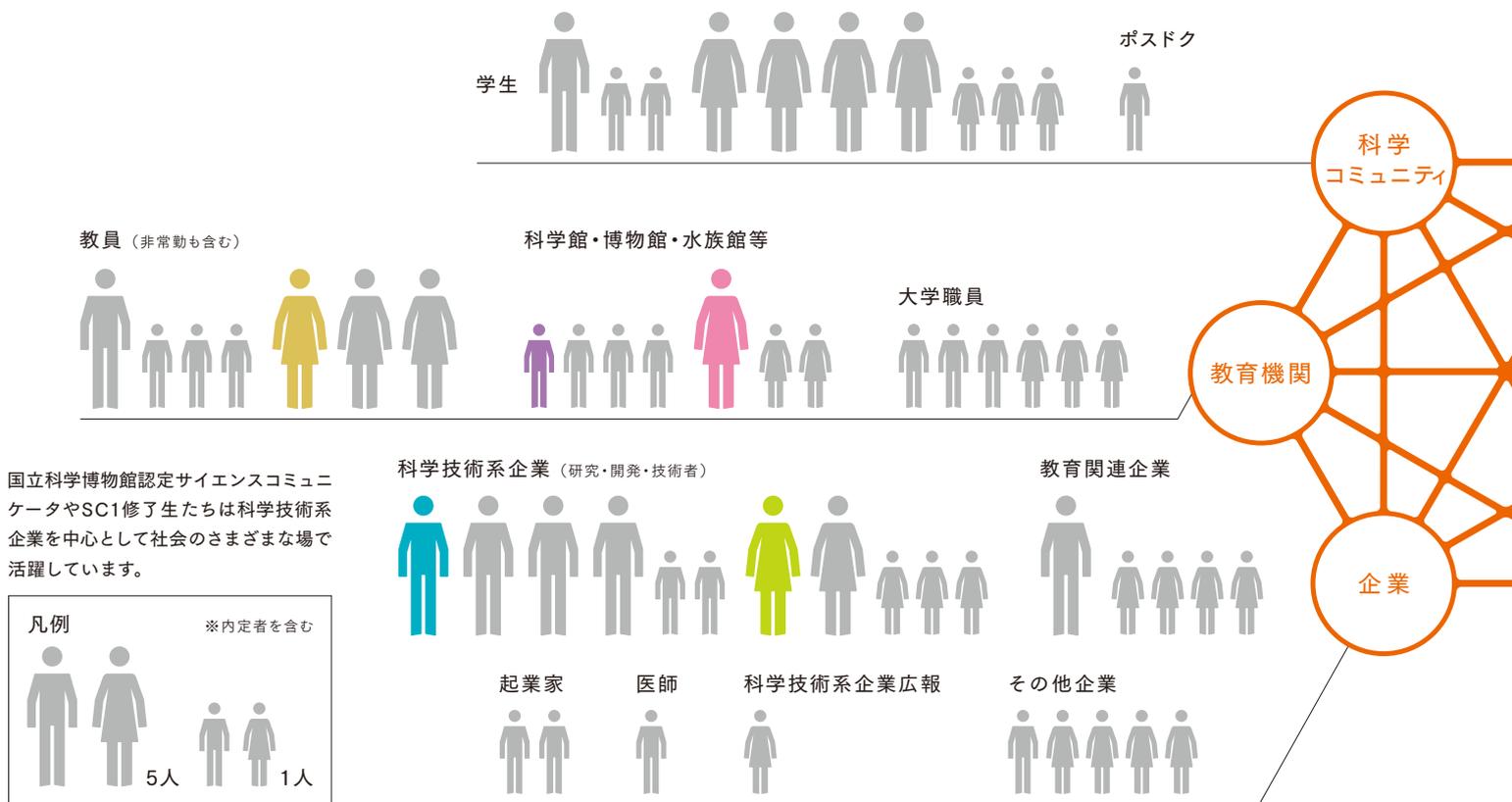
青塚 圭一

群馬県神流町恐竜センター 学芸員
H24年度 SC1修了生
(当時:東京大学大学院)



サイエンスコミュニケーションは科学の魅力を一般の人に伝える話術だと思っていました。しかし、受講してみると自分の研究内容との対話も含まれていることを実感しました。なぜ自分がその研究をしているのか?自分の研究の醍醐味は何か?自分の研究を客観的に見つめて、どこが魅力的なのかを皆と一緒に探していくことはこの講座の面白いところです。普段当たり前に思っていることも知らない人には新鮮な話題となり、自分の予想しないところで興味を持ってもらうこともありました。伝える喜びだけでなく、伝える驚きを体験できたことはサイエンスコミュニケーションを進める上で大きな発見です。学芸員は来館者とサイエンスコミュニケーションをすることの多い職業なので、この講座で発見したことを活かしながら、常に新鮮な話題を来館者に提供していきたいと思っています。

認定・修了後の活躍状況 (平成26年4月現在。平成18~25年度:修了者・185名、うち認定者・83名)



針谷 亜希子

千葉市科学館 教育普及グループ
H18年度 国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター
(当時:日本獣生命科学大学)



私にとって受講して一番大きな変化は、今就いているような職種(社会教育関係)に興味を持ったこと、そのものです。この講座では様々な分野の学生との交流やこれまで全く接点のなかった専門家の方からお話を聞くことができ、視野がとても広がった気がします。また、受講して7年以上経ちますが、講座での様々な活動が今でも仕事全般だけでなく、普段からの考え方の拠りになっていると感じます。現在、科学館・動物園・自然誌系博物館との連携事業である、生物系の科学クラブの企画運営に携わっており、学生時代から興味があった「動物×教育」活動に科学の視点を持った立場から関わることができています。異なったタイプの機関をコーディネートし、それぞれ強みを生かして一つのものを作るというとき、講座での経験や考え方がとても役に立っていると感じています。

尾崎 匠

東日本旅客鉄道株式会社
国府津車両センター
H23年度 国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター
(当時:日本大学大学院)



この講座を受講して、様々な専門分野をもつ講師陣や受講生の仲間と知り合うことができたこと、博物館の裏側にある社会に少し触れる機会が得られたこと、コミュニケーションに対する考え方など、多くのものが得られたと思っています。相手に伝えるには、自分の専攻、興味のある分野だけに偏りがちにならず、目的を明確にして、どんなストーリーをたてれば興味をもってもらえるのかを意識するなど、コミュニケーションの奥深さと、大変さを実感することができました。現在は、技術系の仕事をしているので、“先輩方がもつ膨大な知識や経験・技術を継承するために自分自身がどういったコミュニケーションをはかれば良いのか” “自分なら次の世代にどう伝えていこうか” など、考える上でサイエンスコミュニケーションマインドを活用しながら試行錯誤の日々を過ごしています。

相馬 央令子
独立行政法人
宇宙航空研究開発機構
宇宙科学研究所 システム研究員
H18年度 国立科学博物館認定
サイエンスコミュニケーター
(当時:東京理科大学大学院)



SC講座受講前は、一般の人に面白く、わかりやすく科学を伝えることばかり意識していました。しかし受講中に、私の考えていた方法は一方的なコミュニケーションだったことに気がつきました。今、一般の人と話す時はもちろん、研究者同士で話す際も、相手の疑問や関心を引き出す言葉や場作りを意識し、双方向コミュニケーションになるよう努めています。また研究者が伝えたい内容は、必ずしも一般の人が興味を持つ内容ではありません。そこで、科学を身近な物にデザインし伝える活動をしています。講座で学んだ「伝える」方法は、私の生活のあらゆる場面で役立っています。

長澤 慎之介
独立行政法人 国立印刷局
H20年度 SC1修了生
H21年度 国立科学博物館認定
サイエンスコミュニケーター
(当時:東京農工大学)



『難しい事柄を難しく伝えるのは簡単で、難しい事柄を簡単に伝えるのは難しい』たとえばあなたの近しい人に、「いつもどんなことを勉強しているの?」と聞かれたときに、あなたはどうか答えますか? 専門用語で相手を煙に巻く? 「どうせ言ってもわからないよ」と突き放す? どちらももったいないと思いませんか。あなたの知っている世界の一部分を誰かに伝えられたり、あなたの知らなかったものを見方を誰かから受け取ることができたりする。そんなスキルがあればいいなあと思っている皆さん、お集まりください。きっと、「どこでもいつでも誰にでも」共有できる部分が見えてくると思いますよ。

研究機関等 研究職



研究機関等 広報・アウトリーチ



研究機関等 行政職



省庁 大学研究職



編集・制作・出版



広告会社



新聞社

国立科学博物館 大学パートナーシップ入会校

(平成26年4月1日現在)

- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 青山学院大学 | 千葉工業大学(1) | 東京都市大学知識工学部 |
| 麻布大学(5) | 中央大学理工学部(1) | 東京農業大学(2) |
| 茨城大学(1) | 筑波大学(43) | 東京農工大学(14) |
| 桜美林大学 | 帝京大学 | 東京理科大学(12) |
| 大妻女子大学 | 帝京科学大学(1) | 東邦大学(3) |
| お茶の水女子大学(6) | 電気通信大学(1) | 東洋大学 |
| 学習院大学(2) | 東海大学(1) | 獨協大学 |
| 神奈川工科大学 | 東京大学(22) | 二松学舎大学 |
| 慶應義塾大学 | 東京有明医療大学 | 日本大学生産工学部 |
| 工学院大学(1) | 東京医療保健大学 | 日本工業大学 |
| 国際基督教大学(5) | 東京海洋大学(2) | 日本獣医生命科学大学(2) |
| 国士館大学文学部 | 東京家政大学 | 日本女子大学(1) |
| 国士館大学理工学部 | 東京外国語大学 | 日本薬科大学 |
| 埼玉大学(1) | 東京学芸大学(1) | 一橋大学(1) |
| 首都大学東京(4) | 東京環境工科専門学校 | 文教大学 |
| 上智大学(1) | 東京藝術大学(4) | 武蔵野美術大学(1) |
| 昭和薬科大学 | 東京工業大学(9) | 明星大学理工学部 |
| 女子栄養大学 | 東京工芸大学(2) | 明治大学(1) |
| 聖徳大学 | 東京慈恵会医科大学 | 立教大学 |
| 大正大学 | 東京女子大学 | 立正大学(1) |
| 玉川大学 | 東京女子医科大学 | 早稲田大学(3) |
| 千葉大学園芸学部(1) | 東京造形大学 | |
| 千葉大学理学部 | 東京電機大学 | |

()内は、これまでのSC1受講生数。※平成26年度の入会大学については当館のウェブサイトをご覧ください。別頁担当までお問い合わせ下さい。



武谷 真由美
花王株式会社 研究開発部門
生物科学研究所
H19年度 SC1修了生
(当時:筑波大学大学院)



講座では、様々な現場で活躍されている講師の方々からのお話や、受講生仲間との日々の議論を通して、サイエンスコミュニケーションの多様性と重要性を学び、視野が広がりました。「何を」「どうやって」「何のために」伝えるだけでなく、「伝えたい相手を知り」、「伝えてどうなってほしいか」まで深く追求しコミュニケーションを図ることの難しさと大切さも学びました。講座修了後には親子のためのパンフレット「おとなび」の作成や、イベントでの展示解説などのチャンスを頂き、この講座で学んだことを自分なりにアウトプットすることができました。現在は研究職としてサイエンスコミュニケーションスキルの必要性をひしひしと感じる毎日です。今後も講座で得たチャンスと意識を活かして精進したいと思います!

矢野 真理子
株式会社博報堂
H19年度 SC1修了生
(当時:京都大学大学院)



物理が大の苦手だったのにも関わらず理系に進み、大学で科学に魅了された私は、もっと多くの人々に感動を伝えたいと思い、受講しました。講座では「相手が何を知らたいのかを常に考えながら話をすること」の大切さを経験し、コミュニケーションの奥深さを知りました。修了後は学んだことを「おとなび」やワークシートの製作、ブース展示の説明員など様々な活動で活かしていく中で、コミュニケーションそのものを極めたいと考えるようになりました。現在、広告会社に入社して、刺激的な毎日を送っています! この講座で培ったコミュニケーションスキルを存分に活かし、さらに磨きながら日々邁進していきたいです。